氏　　名	稲葉　基高
授与した学位	博　　士
専攻分野の名称	医　　学
学位授与番号	博　甲第　6901 号
学位授与の日付	2023 年 9 月 25 日
学位授与の要件	医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 （学位規則第 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Impact of frailty on long-term mortality in older patients receiving intensive care via the emergency department （フレイルが高齢者の救急集中治療の予後に及ぼす影響）
論文審査委員	教授 光延文裕　　教授 神田秀幸　　准教授 高尾総司

学位論文内容の要旨

【背景】高齢者に救急集中治療を行うべきか、終末期医療に移行すべきか、臨床上判断に苦慮する場面がある。予後予測を年齢のみで行うことは難しく、脆弱性を示す臨床フレイル・スケール（CFS）が注目されている。高齢者救急集中治療において CFS が予後予測指標として有用か検証した。
【方法】多施設前向きコホート研究。救急外来を受診した 65 歳以上で集中治療室に入室した患者を対象とし、入室時に取得した CFS が 6 か月後の予後と QOL に及ぼす影響を評価した。
【結果】17 の施設から 955 症例の登録があり 650 症例で 6 か月後の調査が可能であった。6 か月後死亡率は 21％で、CFS 1 の 6.2%から階段状に上昇し CFS7 以上では 42.9%であった。交絡因子で調整した後も CFS は独立した予後規定因子であり、6 か月後死亡に対する調整リスク比は 1.19 であった。入院後 6 か月の QOL は、ベースラインの CFS スコアの上昇に伴い、悪化した。しかし、総入院費用とベースラインの CFS との間に関連はみられなかった。
【結語】CFS は救急集集中治療を要する高齢患者の長期予後の重要な予測因子である。

論文審査結果の要旨

高齢者に救急集中治療を行うべきか，終末期医療に移行すべきか，臨床甲上判断に苦慮する場面がある。予後予測を年齢のみで行うことは難しく，脆弱性を示す臨床フレイル・スケール（CFS）が注目されている。

本研究では，救急外来を受診した 65 歳以上で集中治療室に入室した患者を対象とし，入室時に取得した CFS が 6 か月後の予後と QOL に及ぼす影響を，多施設前向きコホート研究にて検討した。6 か月後死亡率は 21％で，CFS1 の 6.2%から階段状に上昇し CFS7 以上では 42.9%であった。交絡因子で調整した後も CFS は独立した予後規定因子であった。入院後 6 か月の QOL は，ベースラインの CFS スコア の上昇に伴い悪化した。

委員からは，予後予測指標として CFS を採用した理由，施設間バイアスについての解釈，データ収集方法の問題点などについての質問があった。本研究者は，先行研究および研究経緯に基づいて，適切に回答するとともに補足説明を行った。

本研究では，救急集中治療を要する高齢患者における長期予後の予測因子について，重要な知見を得たものとして価値ある業績と認める。

よって，本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。